

やつかほじんじゃあと 八握穂神社跡

山大淀の集落の南側に広がる田んぼの真ん中にポツンとした島状の高まりが2箇所あることを知っていますか。そこには石碑が建てられ、周囲にシメナワが張られていて、大事な土地だということを伝えていきます。

一つは、日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」の構成文化財の一つである「佐々夫江行宮跡」を知らせるもの。もう一つには「八握穂社旧跡」と刻まれた石碑が建てられています。この地は、カケチカラ^{はつしろう}発祥の地と伝えられる伝説と深い関係があります。

鎌倉時代に作られた『倭姫命世記』によると、伊勢神宮が造られた後のある秋に、佐々夫江行宮の前の葦原の中で1羽の真名鶴^{まなづる}が昼夜鳴いており、倭姫命が使いをやると、鶴は根元が1株で八百の穂が茂った稲をくわえ、神に捧げるかのように鳴いていたそうです。その稲穂を倭姫命が天照大神に懸け奉ったのが「カケチカラ」といわれています。

石碑が建つ田んぼは、地元でかつて真名鶴が稲穂をくわえていた場所だと伝えられています。現在、田んぼの区画整理などが進みかつての景色とは変わっていますが、今も正月になるとシメナワが架け替えられ、地元で大切にカケチカラの伝説が語り継がれています。



カケチカラの神話（イメージ）



八握穂神社跡の石碑